言語・メタファー・こころ

田　畑　博　敏

(昭和62年5月31日受理)

はじめに

先にわたしは，メタファーが「こころの描写」に必須な言語装置であることを，とくに痛みのことばを例にしてその素描を試みた。[1] その際の痛みのことばは，自分以外の他者が使う痛みのことばを主として考えていた。つまり，痛みのことばが意味充実を完成させるのは，具体的に痛みを経験したときである。したがって，各個人の痛みのことばの意味は「個人的な痛み」にその源を持つのだから，痛みのことばはいわば各個人の専用語である。Aという人物の「いたい！」ということばは，「痛みA」を表現することばであり，Bという人物の「いたい！」ということばは，「痛みB」を表現することばである。それゆえ，(他者専用語だからその意味が本来わかるはずのない) Aが，Bの「いたい！」という発言を理解するということは，B専用の「いたい！」ということばに，Bには体験できないA自身の痛み，つまり「痛みA」を意味として結びつける，つまりメタファーとしてAはB専用の「いたい！」という語を理解するということ，[2] これが要点であった。言い換えるならば，他者の痛みのことばの理解を，他者理解の一形態と捉え，そこにメタファーの構造を見るというのが，狙いであった。

さて本論では，「こころの描写法」としてのメタファーを，自分自身のこころの描写法として記述したい。したがって，もう一度痛みのことばが登場することになるが，ここでは，基本的には，自分の痛みを描写する場合を念頭に置いている。つまり，「他者理解」という枠ははずし，一般に自分の「こころ」の描写，こころの働きをことばで表すという場面を考え，そこでのメタファーの果たす役割を具体的に記述することが，本論の目的である。更に，痛みのことばの外に，感情（喜び・怒り・悲しみ）のことばを考察する。その際，われわれの方法に対する疑義の一部を予め除去することを主眼として，ことばに対する見方，言語観，というものの検討から始めることにする。痛みや感情といったこころの働きをメタファーで描写するということは，すでに形あるこころの働きに対して，あらためてことばのラベルを貼りつけることではない。言語を道具であると見なし，しかも，道具でしかないという見地に立つ言語観に，えてしてこの「ラベル貼り」の考え方が根強い。

マーケットの商品に価格を表示するレッテルを貼るように，痛みや感情をことばであらわすことが，すでに明瞭なこころの働きに単なる分類用の標識を当てがうことだ，というのである。これに対しては，こころの働きははじめからそれほど明瞭な形を持ってはいないのであり，ことばを与えることは，こころの働きに形を与え意味を与え，明瞭なものへと造形することだ，と答えたい。また他方では，ことばで表現できるはずのない事象に，無理にことばによる枠を当てはめ，丁度連続なものを恣意的に区切るように，ことばによる過度に単純な分節化を強制している，という非難もある。これに対しては，ことばの限界を認めるに吝かではないが，ことばによる四苦八苦の工面（それがメタファーという言語装置の使用であるが）によって，いわば近似的に事象そのものに接近することの正当性を弁護したい。いずれにせよ，メタファーという言語現象が事象を，したがって世界を，構成し創出する働きの一翼を担うことを強調したい。そのために，言語は世界にラベルを貼るもの，という仕方でしか言語を捉え得ない言語観を退けて，言語による世界の構成・世界の創出というものを認める言語観を準備する必要がある。このような言語観に依拠してはじめて，メタファーの働きの十全な評価も期待できるからである。したがって本論は，メタファーの具体的な働きの記述を通しての，ふさわしい言語観を背景にしての，メタファー弁護論でもある。

§1　二つの言語観類型

メタファーはなによりもまず言語現象として現れる。しかしそれはどのような言語現象であるのか？同じ言語現象を捉えるにしろ，そもそも「言語」というものをどのように理解し，位置づけているかによって，その捉え方・評価の仕方は変わってくるに違いない。そこでまず最初に，言語観の二つの類型を考えてみたい。むろん，言語についての見方をここで網羅しようとするのではなく，また言語観が二つの系列に完全に収まると主張するのでもない。あくまでこれら二類型は，メタファーという言語現象を理解するための，当座の，言語観の図式であり模型であるにすぎない。しかし，事態を単純化し尖鋭化することによって，逆にある線ないし形がくっきりと視界に浮び上がるはずである。第一の言語観類型を「道具主義・代表主義」の言語観と名づけたい。この言語観によれば，言語はコミュニケーションの道具であり，言語は表現される事物・事象の代理物（代表）である。他方，第二の言語観類型を「自律主義・創造主義」の言語観と呼ぶことにする。この言語観によれば，言語はコミュニケーションのたんなる道具ではなく，コミュニケーションそのものを一部構成するという自律性を持ち，表現されるものの創造に参与するものである。以下，この二つの言語観類型の内実をやや詳細に追っていくことにする。

(1)　「道具主義・代表主義」の言語観

①言語はものごと（事物・事象）を表現し，伝達し，理解するための道具，つまりコミュニケーシ

ョンの道具である。

②道具としての言語は，表現されるべきものごとを可能な限り忠実に反映し，代表しなければならない。

③道具としての言語は，ものごとを忠実に代表するという目的の手段であるから，手段としての分をわきまえていなければならない。すなわち，代表・表現されるべきものごとを押しのけて，それらの前面にしゃしゃり出てはならない。言い換えると，言語は，ものごとがそれを通して透けて見えるほどに透明でなければならず，ものごとが曇って，または歪んで見えるほどに不透明であってはならない。(透明性の要求，または“出しゃばり”禁止令)

④コミュニケーションが円滑に行われるためには，発信者（発話者・送り手）の意図が誤解の余地なく直ちに受信者（聞き手）に理解されねばならない。そのためには明確に定められた規則（コード）に基づいて，言語は使用されねばならない。その際，誤解や曖昧さを誘発する最大の元凶の一つがことばの意味の多義性であるから，一つのことばには一つの意味しか対応すべきではない。(ことばの一意性，one-valuednessの要求)

⑤一つのことばに一つの意味ないし概念が一旦対応したならば，その対応する意味や概念は一定したもの，固定したものであり続けねばならない。意味や概念は変化・流動しない方がよい。意味の「ずれ」，「ぶれ」，「揺らぎ」，「振動」，「たわみ」，「ねじれ」，「ひねり」等は排除すべきである。（意味の固定化の要求）

⑥同様の目的のために，コミュニケーションの現場において，言語は，そこに現れたことば（とそのコード）のみによって情報伝達の機能を十全に果たすべきであって，言語使用の状況・文脈といった，言語を取り巻く場に付随する非言語的要因に依存してはならない。(文脈からの独立性の要求)

⑦どんな二つの言語も原理的には――直接的な翻訳ができない場合は第三の言語を媒介にする等の方策によって――翻訳可能である。さもなければ，そもそもコミュニケーションが成立しない。（コミュニケーション成立の要求，または翻訳可能性の要求)

⑧二つの言語間の翻訳が原理的に可能であるためには，二つの言語の見かけの，ないし表層の文法構造がいかに異なっていようとも――例えば，ギリシア語と日本語の文法構造が語順や屈折の有無においていかに異なっていようとも――それらの言語の深層構造あるいは論理構造は同一でなければならない。つまり，二つの言語の間には常に，第三の深層言語ないし普遍言語が潜在的に存在し，これが媒体となって二言語間の翻訳が可能になる。(深層言語・普遍言語の存在の要求)

⑨われわれの思考は，⑧で述べられた普遍言語によって翻訳されるから，少なくとも言語に関わる文化の相違は，帳消しになる。この普遍言語によって，文化の相違に無関係に，すべての思考が普遍的に表現され，理解される。

以上が「道具主義・代表主義」の言語観の内実である。これと，言わば正反対の方向性を有する「自律主義・創造主義」の言語観を，次に通覧する。

⑵　**「自律主義・創造主義」の言語観**

⑴言語はそれ自体，自律性を持つ文化現象である。

⑵言語は，他の目的の手段としてではなしに，それ独自の自律的運動・変化をする。したがって，ものごとを忠実に反映・代表しているか否かは，ある意味ではどうでもよいことである。（自律性の要求）

⑶言語は，他の何かの表現手段であるよりもむしろ，それ自体で表現し，理解されるものである。例えば詩の言語に典型的に見られるように，言語自体が絵として，音楽として，パフォーマンスの担い手となり，独自の自律的な価値を持つ。つまり，言語はいい意味で不透明である。言語のもつ身体性――音声や文字列の図柄としての側面――が，表現のいわば「様相」modalityとして，表現という活動そのものの一部を構成する。（不透明性の要求）

⑷一つのことばには，多数の異なる意味や概念が対応する。（多意性・多義性の要求）

⑸一つのことばが担う意味は固定することなく，時々刻々・場合ばあいで変化・流動する。それは意味の「ずれ」，「ぶれ」，「たわみ」，「きしみ」，「ねじれ」，「ひねり」，総じて「意味の弾性[3]」という形で現れる。これこそ，新しい意味の創造の契機となる，ことばのもつ意味の著しい特性である。（意味の流動性・弾性・創造性の要求）

⑹ことばの意味は，発話の状況・文脈を参照しなければ十全には与えられない。ことばは，発話の文脈とコードとが〈こみ〉になって初めて意味を持つのであって，文脈から切り離してそのことばのみを孤立させ隔離して考察しても，無駄である。（意味の文脈依存性の要求）

⑺二つの言語は原理的に翻訳不可能である。（翻訳不可能性の要求）

⑻言語はわれわれの文化に根づいているものであるから，文化とは切り離せない。異なる二つの文化間での真の理解・翻訳が不可能であるのに応じて，二つの言語間での真の理解・翻訳は不可能である。（理解不可能性の要求）

⑼われわれの思考や判断は日本語・英語等，いわゆる母国語である自然言語に完全に依存している。ところで言語も文化に根づいているから，われわれは自らが育った文化の外には出られない。したがって，われわれの思考や判断も，われわれの文化に相対的にしか妥当しない。文化に中立な，絶対的・普遍的に真なる思考や判断は存在しない。（文化相対性・言語相対性の要求）

さて，これら二つの言語観類型――「道具主義・代表主義」と「自律主義・創造主義」――を比較してみよう。二つとも，現実の言語の姿を無視した，言語に対する極端な思い込みを有していると言わざるをえない。「道具主義・代表主義」は「世界」と「言語」とをきわめて単純に分けてしま

う——少なくとも，分け得るということは暗黙の前提である。「世界」は，そしておそらくわれわれの「思考」も，言語には依存しない，言語からは独立である。道具としての言語は，ものごとを包む衣裳のようなものである（言語衣裳観[4]）。その衣裳は，ものごとの裸身が——その形状・構造までもが——透けて見えるほどに透明であるべきだという。つまり，ものごとを忠実に反映する言語ほど優れた言語である，という価値基準の前提がここで働いている（①，②，③）。したがって，世界からは独立な言語コードという考えは出てこないし，まして思考がそのような言語コードに依存・影響されはしまいかという配慮も，言語コードからの冒険的逸脱を工夫することの意義を評価する態度も，出てはこない。言語は世界を写す鏡であり，世界の構造に言語がいわば従属的に合致せしめられるべきである，という一方的な要求・前提しかここにはない。[5] そのような前提ないし偏見は容易に，コミュニケーションの成立を第一義とする，一種の機能主義と結びつく（④，⑤，⑥）。曖昧さを極力排除し，文脈の参照という手間を省く，機械的な処理の可能な言語を是とする言語観である。そしてこの機能主義には，翻訳可能性や深層構造の要求という，普遍主義が接続する（⑦，⑧，⑨）。

他方，第二の言語観類型——「自律主義・創造主義」の言語観——はどうであろうか？これも，そのままの形では，実際の言語からはかけ離れた，極端な前提に先導されたものになっていることは，いうまでもない。たしかに，言語の自律性・創造性を強調すべき場面はあろう（例えば，詩の言語の場合）。しかし，文字通り完全に世界から独立した言語などはありえない。言語の不透明性も程度問題であり，それの積極性を評価するあまり，それを言語の常態とすることは狭すぎる見方と言わざるをえないだろう（(1)，(2)，(3)）。意味の多義性・流動性も，文脈依存性もそれが極端になった場合，言語がもはや「謎」と化し，他者との対話はもとより，自分自身との対話ないし独白すらままならぬ事態に立ち至るであろう（(4)，(5)，(6)）。翻訳不可能性を極端に強調しすぎることも問題である。言語を異にする他者との交信は，言語間のゆるやかな翻訳可能性を前提にしなければ成立しない。他者の行動の，言語を交えない観察だけで，他者との交信が可能であるとは思えない。しかし，現実には，多少の間違い・誤解はあろうが，言語を異にする他者とのコミュニケーションが行われている。厳格な虚構のケースをいたずらに振り回すことは，生産的な議論ではない。厳密に言うのならば，二十年前の自分自身の言語と，いま自分が使っている言語との翻訳可能性も，当然疑われることになる。しかし，二十年前の自分の日記を読んで，翻訳可能性を疑う人は，現在のその人の神経症こそ疑わるべきではないか。（もちろん，二十年前の自分の考えや気持ちが理解できないことはあろうが，その「不理解」はことばの意味の「理解」を前提にしているのではあるまいか。）したがって，文化相対論や言語相対論も，いわゆる「強い形」では成り立たないと思われる（(7)，(8)，(9)）。

むろんわれわれは，ぬるま湯につかっている体の折衷案に首肯するのが目的ではない。しかし，

言語に対する信頼と不信との狭間に，われわれは常に立たされていることは，紛れもない事実である。一方で，われわれは言語を信頼したいと願う。われわれの思考や感情をあるがままに表現し，世界をあるがままに記述できることを，言語に期待する。しかし，その期待はすぐに裏切られる。この苦しい胸の内をことばで言い表すことはとうていできないと思うし，モーツァルトの音楽のあの美しさは筆舌に尽くせるものではないと確信する。言語への不信・不満である。もちろん，言語がなければわれわれは手も足も出ない。言語なしではまともな，いや初等的な思考さえままならないことは，うすうすと，いやはっきりとわれわれは思い知っている。言語への不信・不満をもちながらも，言語を信頼せざるをえないという，この抜きがたいディレンマの責め苦にさいなまれたあげく，せめて，言語とはこうしたものだという安定した言語観を持ちたい，とわれわれは望む。その結果でき上がったやや極端な言語観が，「道具主義・代表主義」の言語観であり，「自律主義・創造主義」の言語観である。

二十世紀の哲学が言語に関する根源的な関心によって特徴づけられるという喧伝文句――いわゆる「言語論的転回」の主張――も，このようなわれわれの積年の言語への「半信」，信頼と不信のない混ぜの感情の，哲学的吐露ないし発散ととれなくもない。ところで，「言語論的転回」は日常言語への「不信」を基調として，「道具主義・代表主義」で言うところの（③）「透明な言語」を理想言語とする哲学運動から始まった。そして後には，後期ウィトゲンシュタイン・オースティンらを経て，さらにヨーロッパ大陸でのレトリックの復興（ニュー・レトリック）や記号論の隆盛も巻き込んで，「自律主義・創造主義」の言う言語の「不透明さ」ないし「半透明さ」――言語がものごとを反映・写像すると同時に，その反映・写像の「仕方」が，反映・写像そのものに参与・貢献するという視点――の再評価へと，大きく「転回」していった。(6)

さてそれでは，メタファーないし比喩の再評価――たんなることばの飾り，あるいは言いにくいことを言い易い事柄にして語るという一種の「逃げ」の方法という消極的評価ではなく，その創造的な働きに注目すること――と親和性を持つのは，どのような言語観であろうか？それが「道具主義・代表主義」の言語観ではなく，むしろ「自律主義・創達主義」の言語観ないしはこれに近い言語観であることは，見やすい道理であろう。メタファーの意義が再評価されるには，「道具主義」的な言語観から「創造主義」的言語観への「転回」が積極的に促進される必要があり，そしてそれは現在少しずつではあるが進行していると言える。もちろんこのことは，「道具主義」をきっぱり捨てて，「創造主義」に完全に帰依することを必ずしも要求するものではない。しかし「道具主義」の言語観しか認めない立場では，メタファーの意義が十全に評価されないことも事実である。そのことは強調さるべきである。メタファーを評価する立場を堅持したいならば，戦略的に，「創造主義」の言語観を前面に押し出す必要がある（極端に走る弊を除くことを念頭に置きつつ…）。そこでわれわれも，一見ぬるま湯の折衷案（実は紳士的態度であるのかもしれないのだが）との外観を呈した（か

もしれない）これまでの論調をここで一旦捨てて,「創造主義」寄りの言語観に立脚して「メタファー評価」の陣営に加担することを宣揚し，あわせて，メタファーを不当に低く評価する傾向を持つ「道具主義」の言語観（この際，悪者になってもらう）に果敢に（野蛮に？）宣戦を布告することにする。旗幟鮮明であることは，論者のたんなる戦略であるにとどまらず，論旨を明確に読者に提出するための義務であると信じるからである。

とまれ，メタファーの積極的評価を可能にするであろう言語観が,「自律主義・創造主義」の言語観ないしそれに近い言語観であることは，確認できたとしよう。

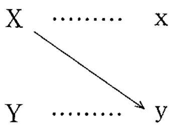
§2　メタファー

前節でわれわれは二つの言語観類型を想定し，メタファーを積極的に評価してそれのもつ可能性を探ることに親和性を示す言語観は第二のそれ――われわれが「自律主義・創造主義」の言語観と呼んだもの――であろうと予測した。それでは，そのような言語観のもとで具体的にはどのような形で，メタファーが捉えられるのであろうか？このことを，とくにメタファーの「構造」との関連で，考察してみたい。

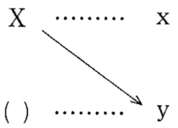
もとより，第二の言語観は，言語が世界を完全に写しうるという意味での言語の「完全性」については疑問視する。というよりむしろ，言語と世界の二つをきっぱり分けて，一方が他方を反映するという発想そのものを退ける，と言うべきであろう。もちろん，言語以前の世界，言語で分節化する前の混沌――感覚される以前の光，色彩，形，音，におい，味，痛み，等の感覚の素材や，喜怒哀楽の感情――の存在を想定することはできる。そしてそれは，言語化される以前に五感によって「知覚」され，こころによって「感じ」とられる。たとえば強い光，明るい色，角ばった形，けたたましい音と知覚され，かぐわしい香り，ぴりっとする刺激的味，ズキズキする痛さとして感覚されるし，また，喜び・怒り・悲しみ・楽しさとして感じとられる。これらは，言語以前に存在し，言語以前に感覚によって受容される。これらの領域は，ある意味で言語の無力がもっとも鋭い形で顕わになる領域である。なぜなら，言語はこれらのものを「作り出す」ことはできないし，これらの「代替となる」こともままならぬからである。しかし，これらの感覚経験や感情は，それらが言語の介在を受けない以前においては，なお混沌であり，未分化であり，貧弱でさえある。言語の分節化――誤解を被りやすい言い方ながら敢えて用いる――を手助けとして初めて，これらの感覚経験や感情はそれ自体独自な，豊かな領域を形づくる（このことをわれわれは次節以下で詳しく見ることになる）。つまり，少なくとも感覚経験や感情の領域では，世界と言語とを，それほどきっぱりと分けることはできない。このことは，強調されるべきである。

もちろん言語は，言語化がより容易で適切な領域においても，完全無欠というわけではない。わ

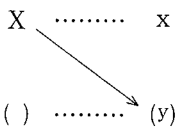
れわれが扱いうる言語は，手段・道具としてはきわめて限られている。多様で無限の世界に対処するには，われわれの言語は，あまりに無力で貧弱である。そのために言語は，手持ちの道具を工夫し，やり繰り算段して，その能力不足を補うよう迫られる。そのような言語的工夫の一つが，メタファーであった。標準的な説明では，メタファーは，本来xなる事物を表す言語Xを，yなる事物（これは本来Yなる言語表現で表わせる）を表現するのに流用する，言語使用である。これは，次のように図示できよう。



しかし，何のために流用するのか，流用の条件はいかなるものか？メタファーに関する議論は，これらの問いにまつわるさまざまな論点の攻防である。これらについては，われわれはすでに一通りの概観を行っている[7]ので，ここでは以下の点を確認するにとどめたい。事物yを表現するのに，言語表現Xを流用するという場合，その流用は「やむをえぬ流用」であるということである。なぜ「やむをえぬ」のかと言えば，それは主として二つの理由があるからである。一つは，事物yを表す言語表現が存在しない場合がある，ということである。つまり，次の図で表される事態にある場合に，「やむをえぬ」流用が生じる。



これはつまり，表現されるべき事物はすでに存在するにもかかわらず，ひとえに言語装置の不備によって，表現手段がないという事態である。二つ目として，さらに一歩進んで，表現されるべき事物yというものそのものが混沌としている場合がある。図で示すと——



すなわち，表現されるべき事物yが存在することははっきりしているものの，事物yそのものを言語抜きで捉えることがきわめて困難である——したがって，それを本来的に表現するはずの言語手段をも欠いている——という事態である。これら第二，第三の事態に対処するための言語的工夫は，やむをえぬ「流用」ないし「転用」として，「濫喩（乱喩）」（カタクリーシス）の名で，伝統的には呼ばれてきた。[8] われわれとしては，濫喩という名をもつ言語的工夫もメタファーとして一括して扱うことにする。そしてこの，第二・第三の事態でのメタファーこそが，われわれがとくに注目したい言語現象なのである。というのは，これが，メタファーという言語現象に特有の「流用・借用」と

いうことが，もっとも尖鋭な形で現れる場合だからである。混沌たる事物y，つまり(y)には，いまだ形がない。それは言語に捉えられてはじめて，事物としても明確に存在する。したがって，通常，メタファー成立の条件ないし手掛かりとされる，事物xと事物yの類似性も，このメタファーにおいてはほとんど効いてこない。xとyが類似しているということは，xとyをともに包含する類の存在が前提されていることになろう。しかしこの場合には，そのような前提を当初から当てにはできない。(y)の存在を明確にするために，いわばxの属する領域を越えて，言語表現Xが借用されるのである。われわれは(y)にあたるものとして，こころの働き，とくに（自分の）痛み，および喜怒哀楽の（自分の）感情を考えたい。それらは元来，存在することが感じられはするものの，明確なそれらの形は言語抜きでは捉えがたいものであるからである。

§3　メタファーとしての痛み

痛みはわれわれに親しいものでありながら，ある捉え難さをもつ，こころの働きである。先天性無痛覚症などの特殊な場合を除いて，だれもが痛みを経験する。うっとうしい頭痛，コリコリする首の痛み，押しかぶせるような肩の痛み，がまんできない腰痛，ぴりぴりと刺すような手足の関節痛，重苦しい胸の痛み，差し込むような腹の痛み，など，「生きられる自己空間」としての身体を持つ人間にとって，これら多様な痛みの経験から逃れることはできない。[9] 同時に，痛みの経験は，人間の「生のあかし」でもある。身体の異常の警報信号としての痛み――例えば，歯の痛みは歯が歯病の細菌に冒されていることの兆候であり，吐き気を伴う右下腹部の痛みは虫垂炎を疑わせ，後頭部から首筋にかけてのズキズキ切り込むような痛みは顔面神経麻痺の前ぶれかもしれない――そのような痛みを欠くならば，直ちにわれわれのいのちに関わる事態を招くことになるし，また自分の痛みの経験があってこそ，他人の痛み，他人の苦しみも想像できる。[10] にも拘わらず，われわれは痛みについてどれほどのことを知っているのだろうか？自分の痛みをどれほど正確に捉えることができるのだろうか？痛みを本来表すことばをわれわれは持たない。痛みに専用のことばはない。[11] 心理学的にも痛みの定義はむずかしく，研究者たちも痛みの単一の「本質」を捉えた定義には，未だ到達していないのが現状である。[12] 痛みは，身体的・感覚的経験であるとともに，苦痛（苦しみ・不快感）の問題でもあり，精神的苦悩にもまたがる幅広いこころの働き・現象だからである。

痛みの「科学的研究」が遅れている[13]こととは無関係に，われわれは痛みに日々直面している。痛みを表現する専用の語彙が不足しているとはいえ，なんとかやり繰り算段して痛みをことばで表さざるを得ない。それらの表現がいかに主観的であろうとも，痛みの「客観的」記述が不可能であれば，“痛みを理解するには，痛みの主観的側面からの接近が最善の方法である”[14]ということになるのである。痛みを理解し，痛みを訴える手段は，結局はことば以外にないのである。そこで，痛

みの表現はメタファーとして現れることになる。本来他の事柄，他の概念をあらわす言語表現を，痛みの表現として借用するのである。

もちろん，言語表現によって痛みが十全に表現できると主張することは，大きな思い上がりとなる。腹がきりきりと痛む，思わず手で押さえる。自然と背中が丸くなる。顔がゆがむ，あぶら汗が滲み出る。激しい腹痛を訴えて駆け込んで来た患者を診て，その振る舞いだけからでも医者は大方の診断ができるかもしれない。いつごろから，身体のどの辺りに発生したか，持続的か断続的かといった痛みの起源や有様，また，吐き気は伴っていないか，熱はないか，呼吸や脈拍に異常はないか等の，痛みに随伴する症状の有無を，医者は更に確認するだろう。診断のための判断材料としての痛みは，もちろんそれだけを孤立して考察したのでは意味がない。他のいかなる症状をどのような状況下で伴った痛みなのか，を調べないと痛みの原因は特定できない。しかし，痛みそのものの質（性質・特性）をことばで表すことは，以外にむずかしい。医者は「どんな痛みですか？ちくちく刺すような痛みですか？焼けるような痛みですか？」と聞く。患者は，いま彼を襲っている苦痛の原因を一刻も早く知ってもらって，適切な治療を受けたいと，自分の腹の痛みを表現できる「ことば」を必死になって探す。「何と言ったらいいのか……ここら辺が錐のような鋭いもので刺されているような……，いやそうじゃなくてペンチで締めつけられているような……」。ほかでもない自分自身の痛みでありながら，相手にわかってもらえるように，それを的確にことばで表現することのいかに困難なことか。こういうことばで言っても，この痛みの感じが相手に伝わったのか，医者はこの痛みのこういう，えも言えぬ感じをわかってくれたのか？この痛みの感じを表す表現として，こういうことばでよかったのか，もっと別のことばはなかったのか？もどかしさ，いらだち，更には不安。自分のことなのに表現できない，この口惜しさ，情けなさ。痛みを訴えたいときほど，ことばの無力を実感するときはない。

それでもなんとかして，痛みをことばで表現しなくてはならない。形のない痛みに，ことばで形を与えてやらねばならない。メルザックとトーガソンは痛みを表現することば（英語）を集め，それらを三つのカテゴリーに分け，それをさらに16個の下位クラスに分類して，それらのことばで表わされる痛みの間の強さの関係を調べている。[15] 英語での痛みのことばの分類例としてこの研究は興味深い。ここに分類の結果を引用して(対応する日本語を付ける)，痛みのことばがメタファーであることの確認作業の基礎資料として，活用させてもらうことにする。

I．感覚に関わる，感覚としての痛みの表現

(1)時間的な（時間に関わる）痛みのことば

flickering——ゆらめく，ちらつく，かすかな，ゆらぐ

quivering——（かすかに）揺れる，震える，振動する

pulsing——律動する，拍動する

throbbing——鼓動する，脈打つ，震える

thumping——ドンドンと叩く，動悸がする，ゴツンゴツンと打つ

beating——（規則的に）打つ，（続けて）叩く，鼓動する

pounding——ドンドンと強打する，ドンドンと叩く

痛みは，絶え間なく，ひっきりなしに続くこともあれば，断続的・間歇的に襲来することもある。突然，何の前ぶれもなく起こることもあれば，規則的・定期的に生ずることもある。痛みにはリズムがあり，律動がある。痛みは時間的な相貌を持つ。痛みは運動の変容である。うねりをもって押し寄せる波であり，とくとくと脈打つ血流である。(出血を伴うひどいけがのとき，脈拍とともに痛みを感じる。）痛みの時間的な表現は，時間や運動の様相という形のメタファーとなる。

(2)空間的な（空間に関わる）痛みのことば

spreading——広がる，広まる，拡散する，放散する

jumping——飛ぶような，跳ね上がる

radiating——発散する，射出する，放射する

flashing——きらめく，閃光を発する，放出する，ほとばしり出る

shooting——ズキズキする，刺すような，飛び出すような

われわれは身体という自分自身に固有な空間，われわれ自身の専有空間を持っている。痛みはこの空間内を，いわば自由に運動する。広がり，拡散し，全身に放射する痛みもあれば，狭まり，凝集し，収縮する痛みもある。走るように素早く，鋭く身体を貫く痛みもあれば，じわーっとゆっくり広がる痛みもある。また，身体の表面の痛み（ピリピリする皮膚のやけどの痛み）や，身体の内部の痛み（何かに蹴つまづいて向こう脛をいやというほど打ったときの，骨にまで泌み込むような痛み）もある。内臓の痛みのような，身体の奥深いところの痛みもある。右手首から右肩・首筋へ，腰のあたりから左膝へ，といった方向性を持つ痛みもある。空間的存在としてのわれわれは，痛みにその運動の（あるいは跳梁の）場を提供している。身体は，痛みの存在空間である。しかし，痛みの存在空間は一種の幻空間である。ある場所が痛くても，その痛みの原因がその近傍に在るとは限らない。とんでもない遠くの場所から，痛みが放散していることがある(いわゆる関連痛)。一見関係のない場所をもみほぐすことによって，痛みが和らぐこともある（種々の神経痛・神経麻痺)。痛みは，空間の中に固定した場所を必ずしも持たないし，一様に分布するものでもない。痛みは変幻自在に身体空間内部を跳び回る。痛み自体は空間的なのか？空間内部に広がり，空間内部で感じられるという点では空間的である。現代の生理学は，脳が痛みを「感じている」ことを教える。では，痛みは脳に在るのか？われわれの素朴な感じではそうではない。痛みは，いままさに痛む身体の部分に場所を占める。けっして脳にはない。だから，痛みの表現は，身体空間のメタファーとな

る。

(3)断続的な圧迫感としての痛みのことば

pricking——尖ったもので突き刺すような，疼く，チクチク刺す

boring——穴をあけるような，穿つような

drilling——（キリなどで）穴をあけるような，

penetrating——浸透する，貫き通す，泌み込む

piercing——貫通する，突き刺すような，泌み透る

stabbing——突くような，刺すような，突き立てるような

lancinating——刺すような，引き裂くような，ズキンズキンする

(4)鋭い圧迫感としての痛みのことば

sharp——鋭い，激しい，激烈な，強烈な

cutting——鋭利な，痛烈な，切り裂くような

lacerating——引き裂くような，裂くような，ズタズタに裂くような

(5)締めつける，圧縮的な圧迫感としての痛みのことば

pinching——挾むような，挾んで締めつけるような，つねるような

nipping——辛辣な，厳しい，身に泌みる

tight——ぴったり締まった，きつい，詰まった

pressing——差し迫った，圧迫する，押しつけるような

gnawing——嚙るような，さいなむ，蝕む，差し込む

binding——縛るような，縛りつける，固める，締めつける

gripping——締めつける，キリキリする，差し込むような，(腹痛によくある）差し込む

biting——咬み切る，膚を刺す，ヒリヒリする，食い込む，身を切るような，きつく締める

squeezing——押し潰す，押し込む，詰め込む，絞りだす，圧搾する

cramping——締めつける，けいれんするような，引きつける

crushing——押し潰す，絞り出す

(6)引き離す（牽引的）圧迫感としての痛みのことば

tugging——引く，引っ張る，引き出す

pulling——引っ張る，もぎ取る，引き抜く

wrenching——捻る，ねじる，もぎ取る，ねじ取る

われわれの専有空間である身体は，さまざまの外部からの働きかけ・刺激に日々晒されている。その中でも物理的な圧力・圧迫はきわめて卑近なものである。下着，眼鏡，上着，靴など常時身につけているものから受ける圧迫。箸，茶碗，コーヒーカップ，万年筆，鞄，ドアの把手，書物，椅子，

机など，ときとして身に触れるものから受ける圧迫。痛みを惹きおこすのは，器物のとり扱いを誤って，不必要な圧迫刺激を受けてしまう場合である。慣れない針仕事をやるはめになって，こころならずも針やピンで皮膚を刺したり，キリで手を突いてしまったり，ハサミ・包丁・カミソリ・ナイフで指を切ってしまうことがある。あのときの刺すような，切るような独特の痛み。ペンチで締めつける痛み，戸棚に指を挟んだ痛み。これらは締めつけ，きつく圧迫する痛みである。鞭で叩かれたり，平手で頬を張られるときのヒリヒリする痛み。金槌のような鈍器で殴られるときの押し潰されるような痛み。毛虫や蜂に刺されたときのピリピリ疼く痛み。われわれをとりまく環境――道具的環境，人的・社会的環境，動植物などの自然環境から，さまざまの感覚を伴う刺激を受け，それを痛みと感じる。痛みの感覚的性質のメタファーは，器物に代表されるわれわれの環境世界から切り離せない。

(7)熱に関わる，または“熱い”と感じる痛みのことば

hot――熱い，激しい，熱っぽい，熱した

burning――燃えるような，燃えるように熱い，焼けつく，焼けるように熱い

scalding――火傷するような，火傷するように熱い

searing――焼けるような，焦がす，焼きつけるような

「熱さ」は度を越すと「痛み」に変わる。やけどの場合，最初の瞬間は熱さと痛みが入り混じって区別がない。皮膚が冷えてくると，徐々に痛みが主流となる。それも他の痛みとは違う，熱がいつまでも籠っているような痛みとなる。このやけどのときの熱いような，熱の籠もった痛みの感覚は独特のもので，よく記憶に残る。それがメタファーとなって，必ずしも熱を伴わない痛みの表現に現れる。それは感覚が誤ったのではない。感覚はそのように感じたのである。熱がなくとも，あたかも熱のこもった痛みであるように感じたのである。その「感じ」，その「痛み」を偽りと呼ぶことはできまい。

(8)明白な，はっきりした痛みの感覚を表すことば

tickling――むずがゆい，くすぐったい

tingling――疼く，ヒリヒリする，かっかとする

itchy――痒い，むずむずする，うずうずする

smarting――疼く，ヒリヒリする，ズキズキする，泌みる

stinging――刺すような，チクチクする，ヒリヒリする，疼く

(9)にぶい，鈍重な痛みの感覚を表すことば

dull――鈍い，ぼんやりとした，和らいだ

blurred――ぼんやりとした，曇った，鈍った，くすんだ，かすんだ

sore――苦痛を与える，ひどい，つらい，炎症を起こした，痛みを起こす

drawing――引いて行く，退きつつある，後退する，遠のいている

numbing――痺れるような，無感覚にさせる，ぼーっとさせる，麻痺させる

hurting――損なわせる，傷つける，けがをさせる，けがをした

aching――疼く，うずうずする

heavy――重々しい，ずしんとする，鈍重な，しつこい

steady――じっと変わらない，頑固な，どっかと腰を据えた

痛みにも，快い午後のうたた寝を突然中断させるような，強い，明確な痛みもあれば，ぼんやりと鈍い，ほとんど痛みとは感じられない弱く，淡い痛みもある。痛みはわれわれを覚醒させる。逆に，覚醒しているときしかわれわれは痛みを感じない。痛みが「生のあかし」である一つの理由が，ここにある。はっきりした意識をもっているからこそ，痛みに精神を集中させることが可能であり，痛みを感じることができる。薬物や催眠によって，意識を低下させて痛みを感じなくさせることは，いわば半分死なせることである。十全に生きていてはじめて痛みを感じることができる。もちろん，痛みは苦しみでもある。生きているがゆえに痛みの苦しみを受けるとしても，生きることそれ自体が苦しく思われるほど痛みが激しいとき，一時的にも意識を低下させて痛みを和らげる必要があるかもしれない。その意味では，「生のあかし」としての痛みは，両義的である。痛みは意識があること，つまり生きていること，の確証を与えるものでありつつ同時に，生きることに苦しみを与えるものでもあるからだ。

(10)多方面にわたる感覚としての痛みのことば

tender――弱々しい，穏やかな，触れると痛む，ピリピリした

taut――ピンと張った，張り詰めた，緊迫した

rasping――きしるような，ギシギシきしる，きしむ，ギシギシとした

tearing――破る，引き裂く，かきむしるような

splitting――割れるような，裂けるような

II．感情的，情緒的なことばに訴える痛みの表現

(11)緊張，緊迫としての痛み

nagging――がみがみ小言を言って悩ますような，うるさく迫る

dragging――引きずるような，だらだらした，のろのろといつまでも終わらない

tiring――うんざりする，我慢できない，いやになる，うっとうしい

fatiguing――骨の折れる，疲れさせる

exhausting――枯渇させる，疲労困憊させる，消耗させる，心身を疲れさす

(12)自律的，自動的，無意識的な痛みのことば

nauseating――吐き気を催す，悪心を伴う，ひどく不快な

choking——息苦しい，息が止まりそうな，窒息しそうな，息が詰まりそうな

sickening——病気になりそうな，むかつく，吐き気を催す，むかむかする

suffocating——窒息するような，息が詰まる

痛みは苦しく，つらく，不快なものであり，喜ばしく，愉快なものではない。できれば避けたい，取り除きたい，迷惑な客である。しかし痛みは，そのようなわれわれの気持ちにはお構いなしに迫ってくる。痛みの表現として，痛みに対するわれわれのそのような情緒的・感情的反応を示すメタファーが多いのも頷ける。なにより，痛みは嫌なものである。忌避する気持ちが昂じて，完全な拒絶反応を呈するようになると，「吐き気を催す」痛みとなる。胃の中の食物を吐き出すのと同様に，痛みも吐き出さるべきものとなる。

⒀不安，恐れとしての痛み

fearful——恐ろしい，もの凄い，怖いほどの，不安に陥れる

dreadful——恐ろしい，ひどい，いやな

frightful——すさまじい，もの凄い，恐ろしいほどの，驚くべき，恐怖に陥れる

terrifying——肝をつぶすほどの，おそるべき

苦しい痛みは，われわれを不安にさせる。これ以上痛みに耐え得ないのではないか？痛みの苦しさのためにまいってしまうのではないか？あるいは，痛みが意味する身体の異常，疾病への不安も起こるだろう。悪い病気にかかったのではないか？このまま死ぬのではないか？痛みそのものが恐ろしいのと同時に，痛みが象徴的に表すものを恐れるのである。痛みが表す身体の異常が予めわかっているものならば，まだよい。痛みがどこから来ているのか，何が原因で痛むのか不明の場合，一層不安が募る。痛みは不安と一体化して増幅する。痛むのではないか，と恐れる。すると通常痛くもない注射も，ひどく痛く感じる。[16] そしてさらに不安になる。不安は痛みのメタファーであり，逆に，痛みは不安のメタファーである。

⒁罰としての痛み

punishing——懲らしめる，ひどい目に会わす，苦しませる

gruelling——ひどい仕打ちの，ひどい罰となる

racking——拷問にかけるような，苦しめる

cruel——ひどい，むごい，残酷な，無慈非な

vicious——邪悪な，御し難い，非難すべき

torturing——拷問にかけるような，ひどく苦しい，苛烈な

killing——死ぬほどの，死に到るほど苦しい，殺されるほどの，破壊するような

痛みは単なる感覚ではなく，「文化的」経験である。例えば，分娩時の痛みは民族によっても感じかたが異なるらしい。[17] われわれの文化においては，出産は女性の一生の一大事であり，出産に伴う痛

み・苦痛も相当大きいものとされている。出産をさほどの大事ともせず，また出産に伴う痛みも驚くほどのものではない，と見なす文化を生きる人々もいる。痛いと思えば一層痛みが増大するように，社会的に教えられる痛みというものが広範囲にある。痛みは文化的なのである。罰としての痛みの観念は，そういう痛みを規定する文化的背景の中でも際立ったものであろう。宗教的な贖罪の手段としての痛みは，超越者から命じられた絶対に履行すべき義務であり，遭遇すべき体験である。この考えを喜んで受け入れる者にとっては，痛みに耐えることは崇高な行為であるが，そうでない者にとっては拷問であり，地獄の責めである。

⒂情緒的，評価的，感覚的の三者の混合型

grinding——すり潰す，すり砕く，つらい，ギスギス痛む，すり減らすような，きしるような
wretched——悲惨な，不幸な，不快な，いやな
awful——ひどい，おそるべき，すさまじい，とんでもない，凄惨な
wicked——悪性の，たちの悪い，ひどい，激しい，有害な，不快な
blinding——目をくらます，盲めっぽうな，分別を失わすほどの

III．痛みを評価する表現

distracting——気を散らす・そらす，まごつかせる，混乱さす
annoying——いらいらさせる，悩ます，苦しめる
troublesome——やっかいな，面倒な，うるさい
bearable——耐え得る，我慢できる
miserable——みじめな，ひどい，惨憺たる，悲惨な
ugly——不快な，いやな，みにくい，険悪な
intense——強い，激烈な，激しい
violent——激烈な，猛烈な，暴力的な，極端にひどい，はなはだしい
agonizing——はげしい苦しみを伴う，苦悶に満ちた，悶え苦します
savage——獰猛な，狂暴な，残忍な
unbearable——耐え難い，我慢できない，やりきれない
intolerable——耐えられない，我慢できない，持ちこたえられない

これら痛みを表すことば（英語）を見て驚くことは，メルザックらも言っているように[18]，きわめて多方面に亙っていることである。そのことは，痛みが決して単一な性質の感覚経験ではない，ということを雄弁に物語っていると言えよう。「痛み」ということばは，この多様で複雑な経験の複合体に，いわば申し訳程度に付された便宜的名称にすぎない。「痛み」という一語で，この経験は決して語り尽くせるものではない。しかしそれでも，ことばで痛みを語ろうとすれば，数々のことば

を――借り物のことばを，つまりメタファーを――繰り出さざるを得ない。メルザックらは，一応の分類規準として，Ⅰ感覚的，Ⅱ情緒的(感情的)，Ⅲ評価的と三つに大きく分けているが，これらは，Ⅰ間主観的，Ⅱ主観的，Ⅲ客観的，という伝統的な三部法に対応するものではないことに注意すべきである。Ⅲの評価的とされる語彙群は，客観的な数量化を容易に受け入れる意味を持つものではない。これらは，きわめて主観的な色調を帯びた「評価」語である。Ⅰの感覚的とされる語彙群も同様である。その意味では，Ⅰ，Ⅱ，Ⅲのいずれの語彙群もすべて「主観的」な色あいを持っている。したがって「主観的」という語は，説明項としてはここでは無力である。むしろ，これらの語彙群はメタファーとして，すなわち，借用概念に基づく表現と見るべきである。そのことによって，痛みという経験のもつ重層性を一層鮮明に捉え得るはずである。

もう一つメルザックらが出している結論は，さまざまな職業的・教育的背景を異にする被験者の間で，痛みのことばの分類の仕方と，痛みの強さに関する表現間の相対的位置が，相当高いレベルで一致したということである。(19) つまり，個々の痛みの感じかたは人ごとに異なるであろうが，その分類法や，痛みのことばの評価の仕方はよく似ているということである。これは，痛みが単なる感覚ではなく，文化的な経験であることから，同一または類似のグローバルな文化圏内部では類型化しやすいということであろうか。しかし，まったく異質の文化圏を比較したとき，必ずしもこのような結果が出るかどうかは定かではない。

いずれにせよ以上で，痛みのことばがメタファーであり，痛みの経験が借用概念によって形を与えられ，捉えられるということの確認作業ができた。

§4　メタファーとしての感情

次に，こころの働きの大きな部分である感情を取り上げる。感情が存在することは疑い得ない。しかし，それがどのような感情であるかはことばによって表出する外はない。感情の場合も，痛みの場合ほどではないにしろ，「専用」の言い方は少ない。したがって他の領域からことばを，概念を，借用して感情を表現せざるを得ない。むしろそのことによって，多様で微妙な感情が造形されてくる。

(1)　喜　び

喜びの感情ほど，「生命」にふさわしい感情は他にあるまい。生命の無い物質は，「生きる」ことの喜びを知らない。「生きる」ことの躍動を知らない。喜びの感情は，それゆえ，「生命」，「躍動」という形のメタファーとなる。

《身体空間の開放としての喜び》

喜びに満ちた身体は，喜びの躍動によって外部に向けて開放される。喜びに“跳び廻りたく”なり，

“走り廻りたい”と思う。“飛び上がる”ほど，嬉しい。“身体は軽くなり”，“宙に浮くような”気分であり，更には“舞い上がって”“天まで昇ってしまいそう”になる。軽くなった身体には“弾み”がつく。“体もこころも弾む”のだ。“足が地につかない”。“体の内側からふわっと浮く”ようだ。身体は，外に向かってどこまでも伸びていこうとする。無限に拡がろうとする。それは生命の進展に必然に随伴する運動である。“声を出したくなる”，“歌でも歌いたくなる”。“顔がほころび”，自然と“微笑がもれる”。進展し拡大する生命がその包容力を増すように，喜びも受容性を増大させる。喜びが寛容を招く。困難な要求も，喜びに満たされているときは苦痛には感じない。それがまた喜びを増す。楽器の練習をする際，努力して難しいパッセージが少し弾けるようになる。喜ばしい。もっと練習を重ね，もっと巧く，美しく弾こうと努力する。練習は苦しいとは感じられない。向上すると，喜びが更に増す。喜びは喜びを生む。

《明るさ・光としての喜び》

喜びは軽い，従って極限的な軽さをもつ光に連なる。喜びに満ちているとき，“世界全体がキラキラ輝いて”いて，自分もその周囲も皆明るい。世界もこころも“バラ色”に輝いている。喜びは“光の洪水”，“明るさ”によって象徴される。しかし，光が多すぎると“まぶしい”こともある。まぶしさに戸惑い，目がくらむように，喜びが大きすぎると驚きが生じる。

《春・晴れとしての喜び》

生命にふさわしい喜びの感情は，季節としては“春”，あるいは人生の春，すなわち“青春”に喩えられる。むろん，老年になっても喜びが無くなる訳ではなかろう。しかし，老年の春びは安定していて恬淡である半面，どこか躍動感・生命感に乏しい。喜びは若さにこそふさわしい。そして，春の新鮮な大気，“晴れた”空，澄んだ空気に連想が及ぶ。“春が来た”ような喜び。春は雪深い北国が待望する喜びの季節である。季節や天候が，人間の持つ感情の在り方に多大の影響を与えることは言うまでもない。「春」や「晴れ」の天気は，いやでも人を外へと誘い，活動を促す。喜びも，そのような外部への進展としての「春」，「晴れ」のメタファーで造形される。

《充足・満足としての喜び》

精神的な喜びと肉体的な喜びを，判然と区別する立場があろう。しかし，そもそもそれら二つをいわば実体的区別として立てることが可能なのだろうか？身体を持つわれわれは，たとえ精神的喜びと言えども，身体空間で「感じる」ものであることは，肉体的喜びと変わるところはないと思われる。たとえば数学の研究は「純粋な」，したがって「精神的な」喜びを与えると言われる。[20] しかし，感情としての「喜び」であるかぎり，その「喜び」を生みだすものが身体に関わるものであれ，そうでないものであれ，「喜び」の感じに区別はない。（数学の研究と言えども，まったく身体を使わないということはできない。紙の上の数式を見る「目」が必要であり，式や文字を書くために「手」を動かさねばならない。もちろんそれらは数学的思考の「補助手段」にすぎないとも言えるが，そ

れらをまったく欠いては研究そのものが成り立たない。)「精神的」と「肉体的」喜びの区別はむしろ，感情としての「喜び」そのものの区別ではなく，その現象形態とそれから惹き起こされる諸結果の価値づけにおける区別であろう。持続する満足感を伴う喜びが「精神的」であり，いわば「高級」な喜びであるとされるのに対して，瞬時に燃え上がり直ちに消滅する喜びは「肉体的」であり「低級」なものと貶められる。しかし，その予断は伝統的な「身体の蔑視」を引きずっているのではあるまいか？喜びの感情の間に区別があるとすれば，それはいわば位相の区別であり，喜びに形を与えるメタファーの類型の区別であって，実体的区別ではないと思われる。“満ち足りた”，“充実感のある”喜びは，持続する喜びの感情であって，それは「生きがい」感をもたらす。そのような満ち足りた喜びは，「生きている」という，深い「生」の「手答え感」，「有意味感」を与える。“生きていてよかった”，という喜びであり，生きることへのいわば「自信」を生みだす。

《行動の原動力としての喜び》

生きることへの「自信」は，行動の原動力になる。ある行動のもたらす喜びが，次の行動を引き出す〈力〉となる。一つの行動の成功による喜びは，“何をやってもうまく行きそうな”気持にさせる。それが弾みとなってますます「やる気」が起こる。気力が充実し，何事にも挑戦しようとする「前向き」の感情が湧く。この生の原動力としての喜びこそ，最大の「生命の横溢感」であろう。人は過去を省み，未来を志向する。喜びに満ちたこころは，過去の苦しい経験をそのまま受け入れ，未来にそれを教訓として生かす。そのようなことが可能であるのも，現在の喜びが未来への原動力となるからである。この点で現在に熱狂し，現在の瞬間をしか生きない躁病者の興奮とは区別する必要がある。躁病者は，「過去をすぐさま，きっぱり忘れ，未来のことを考えない」,[21] ひたすら現在を楽しむ。彼は過去志向・未来志向の機能停止に陥っているのだ。それは，「他我との共同世界の構成的経験の機能停止」に由来するが，それは結局は「自我」の構成に失敗していることに基づく。[22]生命感の横溢する喜びは，充実した自我の構成，自分の役割の自覚を前提としている。喜びに溢れるこころは，自分が今，これから何をすべきか，他に対してどう振る舞うべきかを心得ている。こころは自分の喜びを原動力として，他者との，世界の共経験を実現する。しかし，躁病者の興奮は他者に働きかけはするが，共経験を構成するには到らず，場違いで唐突な「飛入り」となるにすぎない。ビンスワンガーは，「礼拝中の教会に闖入してオルガン奏者の演奏を賛美し，オルガンを教えてほしいと頼んだかと思うと，すぐに教会を出て子供たちのフットボールの仲間入りをした」婦人の症例を報告している。[23]躁病者は自分の喜びを経験してはいない。したがって他者の喜びも理解できないし，他者と喜びをともに持つこともできないのである。

この原動力としての喜びが，おそらく「生きがい」を感じる前向きな感情の中心をなすものと思われる。単なる幸福感，幸福を感じる喜びというものが，安定・平静へと向かい，いわば眠りの心地よさへと固着し停頓しがちであるのに対して，「生きがい」を感じる喜びは動的で前進的である。

幸福感が陶酔による自我の睡眠へと連なるのに対して，「生きがい」を感じる喜びは自我を目覚めさせる傾向にある。喜びは未来志向的な〈力〉である。現在に喜びの原因があるとしても，その方向は現在に反射するのではなく，未来へと延びる。“若いひとのほうが生きがい感を持ちやすい理由の一つは，彼らが過去という重い荷に制約されることなく，すべてを未来にかけて，わき目もふらずに何ものかを創り出そうと力のかぎりをかたむけうるからである。”[24]

(2)　**怒　り**

怒りは“あらゆる感情のうちで取りわけ疎しく気狂いじみた”感情だと言われる。[25]“確かに，怒りは自らを抑えることもできず，品位も汚し，親しい間柄を忘れ，……，公正真実を見分ける力はなく，言わば，自らが押し潰したものの上に砕けて散る破滅に似ている”[26]のである。怒りを表現するメタファー，怒りに形を与えるメタファーも，このような古くからの「怒り」観を代弁する。

《怒りは狂気である，怒りは短期の気狂いである（セネカ[27]）》

「感情に捕えられて理性を失う」という言い方をするとき，その「理性を捕える」感情の代表格が怒りであろう。怒りは理性を狂わせる，それゆえ最も非合理な，あるいは反理性的な感情である。つまり，怒りは狂気である。“怒りに狂う”，“気が狂う怒り”，“業が湧く怒り”，“自分自身を見失う怒り”，“我を忘れる怒り”。このような表現は，怒りの感情に満ちたこころが短期間狂っているものとして造形される様を表わしている。狂気は一般に望ましいものではない。狂気が判断を誤らせると見られるからだ。このことから怒りに捕えられないことが，大きな徳目の一つとなる。徳のある人は怒りがこころに湧き起こったとしても，それに圧倒されてはならず，それを抑制し手なずけねばならない。しかし，それは難しい。手なずけ得るほどの怒りはむしろ怒りではなく，単なる興奮か気持ちの昂ぶりであって，真の怒りは爆発的に人を襲うからである。

《怒りは爆発である，他の感情は「出現」するが怒りは「噴出」する（セネカ[28]）》

“怒りが爆発する”，“怒りが湧き上がる”，“暴発する怒り”。怒りはエネルギーの奔流である。それは瞬時に〈力〉を開放する。したがって，そのエネルギーのはけ口を見つけている暇がない。エネルギーを安全な方向に回路づける余裕がない。怒りは往々にして，周囲への暴力となる。

《暴力としての怒り》

“殴りつけたい怒り”，“怒りに拳を振るう”，“蹴飛ばしたいほどの怒り”，“物を投げつけたい怒り”，“何もかも滅茶苦茶にしたいほどの怒り”，“そこいら中叩き壊したい怒り”，“何処へもぶつけようのない怒り”，“八つ当たりする怒り”。

《怒りは身体の激動である，怒りは身体空間の大地震である》

“怒りに全身がわなわなと震える”，“頭に血が上る”，“血管が切れるほどの怒り”，“怒りに目が血走る”，“怒りに毛が逆立つ”，“怒髪天を突く”，“血が逆流する怒り”，“怒りに歯ぎしりする”，“唇をかみしめる”，“怒りに青筋が立つ”，“血が湧き立つ怒り”，“顔を真っ赤にして怒る”。開放され

た怒りのエネルギーは，身体空間を駆け巡る。身体内で衝突し，身体の各部を大きく揺がす。

《怒りは熱であり，火である》

“燃える怒り”，“メラメラ燃え上がる怒りの炎”，“怒りで体が熱くなる”，“怒って頭からゆげが上がる”，“怒りが沸騰する”，“胸が熱くなる怒り”，“怒りの業火”，“烈火の怒り”。エネルギーの蓄積は激しい熱を生みだす。身体空間がその熱で燃え上がる。

《怒りは身体中に座を持つ》

“腹に据えかねる怒り”，“腹わたが煮え返る怒り”，“むしょうに腹が立つ”，“胸くそが悪い”，“胸につかえる怒り”，“頭に来る”。怒りのエネルギーは身体空間の特定の場に，特に多量に停留する。それが身体空間中の怒りの座である。

《怒りは排泄される》

“怒りを吐き散らす”，“口汚いことばを吐く”，“わめき散らす”，“鬱憤を晴らす”

《自然現象としての怒り》

“怒りの雷が落ちる”，“荒々しい怒りの旋風”，“怒りの大浪”，“怒りの暴風雨”

しかしそれにしても，なぜ人は怒りを持つのか？このような非合理な感情が人のこころに湧き起こる理由は何であろうか？アリストテレスは「苦痛を受けたことへの報復の欲求」という，怒りの定義を挙げている。[29] 他から自分が受けた，おそらく不当な仕打ちをなんとか埋め合わせようとする欲求が怒りだとすれば，この感情はいわば正義を要求する感情だということになる。しかし，正義を要求する感情が，克服すべき悪徳としてしばしば弾劾されねばならないのはなぜなのか？もし人間が怒りを持たなかったら，どうなるか？たとえば，訳もなく他人に頭を殴られても，怒りもなにも感じないとしたら，どうなるか？痛みを感じることができなければ，身体の損傷さえ気づかず，細菌の汚染等で命を縮めることがあるように，怒りを感じられないとしたら，こころの損傷にも無頓着のまま，いわばこころの死を早めることになるのだろうか？セネカは怒りの一定の効用——たとえば，怒りなくしては，勇猛果敢な行動によってなし遂げられる戦争中のいかなる偉業も行われないことなど——を認めつつも，怒りを健全な限度内におくべきことを強調してやまない。[30] しかし，怒りがあること自体が不合理なこととは思えない。現代の心理学者の中にも，怒りを含めて，人間の感情の積極的な存在理由を考える人もいる。[31] だがここでは，これ以上怒りの存在理由を詮索することは差し控えることにする。

(3)　悲しみ

だれもが一生のうちに何度も悲しみの感情を抱く。肉親との死別，友人や師との別れ，恋人との別離。あるいは永年飼っていたペットを亡くしたり，愛着を持っていた道具等を手離さざるを得ないときなども，悲しい気持ちに捕えられる。悲しみは，喪失にたいする反応過程である。愛するものを失った後に訪れる，その喪失の受容・欠損の承認のプロセスが悲しみである。欠損の承認は，

ゆくゆくは成就される。したがって，悲しみもゆくゆくは消滅する。つまり，悲しみは本来的に消滅を最終目的とするこころの過程である。病的な悲哀を通り越したうつ病の「自責」では，欠損の承認が成立しないという。[32] さまざまな悲しみの中で最も深いものは死別，とくに近親者とのそれであろう。死は永遠の別れであり，失われた対象は二度と戻らない。しかし，時が経てばその悲しみも次第に癒えてくる。つまり，喪失という事実を受け入れるのである。もちろん，失われたものは何ものにも替え難い。しかし結局は，その欠損は何らかの形で埋め合わせられる。それが正常な悲しみである。病的な悲しみは，欠損の受け入れができずいつまでも悲嘆に暮れている，あるいはその悲しみの在り方が異常であるものである。ボウルビイによれば，正常な範囲での悲しみの過程に四つの段階がある，という。[33] 第一段階はショックによる無感覚の状態である。第二段階では失ったものを取り戻そうとする衝動が支配し，啼泣したり怒ったりする。第三段階では絶望と抑うつに蝕まれ，引き籠もり，悔やみ，自責し，何も手につかない。第四段階で，再適用，再構成，つまり欠損を受け入れ，それを埋め合わせるところに到達するという。この段階で，離脱，つまり欠損した対象への執着を捨てて，気持ちを立て直すことが生じる。

《呆然自失の悲しみ》

“涙も出ないほどの悲しみ”，“声も出ない”，“ぽっかり穴が開いた”，“放心状態”，“目の前が真っ暗になる”，“お先真っ暗”，“世の中がおしまいになる”。これらがボウルビイの第一段階，すなわちショックの直後の放心，無感覚の状態である。

《慟哭の悲しみ》

“涙がとまらない”，“血の涙を流す”，“号泣する”。泣くことは悲しみの直接的表現であり，悲しみの象徴である。泣くという感情の発露に対応して，身体各部が激動する。“胸が締めつけられる”，“胸が痛む”，“胸が詰まる”，“胸が苦しくなる”，“胸が張り裂けそう”，“胸からこみ上げてくる”，“胸に釘をさされたような”，“頭が重い”，“ハンマーで頭を殴られたような”，“断腸の思い”。怒りのときの身体空間の振動が外に向けられていたのに対して，悲しみのそれは内攻的である。

《悲しみは身体空間の中心に沈み込む》

“落ち込み”，“どん底に落ち込んだ”，“奈落の底に沈んだ”，“意気消沈”，“うずくまりたくなる”，“何かに打ちひしがれた”，“背がうなだれる”，“がっくりと肩を落とす”，“転落”，“力が抜ける”，“谷底に落ち込む”，“深い海の底にいるような”。喜びが外へ向かっての開放であり，外部のものの受容・外部のものへの寛容であったのに対して，悲しみは自我の中心の無限小へと縮小し，貝のように殻を閉ざす。小さな自分の中心に固着する。

《悲しみは暗い闇である》

“世の中が闇に閉ざされる”，“暗黒の世界”，”地の底”，“奈落の底”，“世界中が灰色”，“黒の世界”，“灰色の世界”。明るく，光輝いていた喜びの世界と対照的に，悲しみの世界は暗く，かすんでいる。

闇に包まれ見通すことができない。

こうして感情は，メタファーとしてことばによって形を与えられ，意味を賦与される。しかしここで一つ疑問が残るかもしれない。それは，感情はことばによってよりはむしろ，身体の動きや顔の表情によって一層明瞭に，細かにその姿を呈するのではないか，という疑問である。いくつかの側面ではその通りであろう。ことばによらずとも，その人の振る舞いを見るだけで，その人の表情を伺うだけで，彼が怒っているのか悲しんでいるのかは一目瞭然であろう。「こんにちわ」ということばをむっとした顔つきで発したとしたら，相手は挨拶とは受け取らないであろう。ことばには偽りが忍び込む可能性があるが，表情には嘘がない。もちろん，怒ったふりをしたり，悲しみをこらえて明るく振る舞うということはある。表情にも見かけだけのものがあって，表情からその人の本当の気持ちを読み取るには，ある種の熟練を要する。[34] しかし，たとえば，恐怖や強い驚きの表情を隠すことは難しい。取り繕おうとすると，かえって不自然に顔がこわばったりして見破られてしまう。ことばに比べると，表情ははるかに直接的に感情を吐露する。その意味で，感情には嘘がない。しかし，そのことから直ちに，感情の表現は言語によるより表情によるほうが正確でふさわしいということにはならない。身体の動きや，顔の表情をコミュニケーシュンの重要な一手段とすることは，妥当なことである。永年連れ添った夫婦では，目の合図だけで気持ちが通じあうだろうし，恋人たちは手を握り合っているだけでことばは要らないかもしれない。また，生後三か月の乳児でもすでに，母親を認めるとほほ笑みかける。母親もこれにほほ笑んで答える。しかし，乳児の顔面の「筋肉の動き」をなぜ，単なる笑いではなく，「ほほ笑み」と言うのか？「ほほ笑み」ということば自体，ある色彩を帯びている。意味が賦与されている。乳児の笑いは，乳児の，母親にたいする安心し，信頼しきった，親愛の情を示すまなざしとして捉えられたとき，「ほほ笑み」ということばを獲得する。ことばで造形することは，分類のラベルを貼りつけることではない。乳児のいたいけな微笑を「ほほ笑み」ということばで造形し，意味づけるのである。同様に，自分のさまざまの感情を表現するとき最終的にはことばを用いるのは，自分の感情のディテールを仕上げるためである。大雑把なデッサンならば，体の動きや顔の表情で間に合う。面と向かった相手には，その方が印象深いこともあろう。しかし，最終的な意味づけをし，形を与えるときはことばに頼らざるを得ない。思いの人にいよいよ愛を打ち明けようとするとき，ことばの使用を禁じられるとすれば，どんなにか苦労することか想像してみるとよい。感情をことばで表すことは，すでにある世界の中の一項目にラベルを貼ることではない（貧しい言語道具観！）。ことばは，そのような意味での道具が行う以上のことをなし遂げる。ことばは，世界の中で感情という曲を演奏するときの楽譜のようなものだ。（感情自体は楽想に，表情は発せられる音や声に喩えられよう。）そしてメタファーは，オーケストレーション（楽器の用い方）であり，調性（音素の秩序）であり，楽曲形式である。つまり，メタ

ファーは楽譜（＝ことば）の構成法である。

註

(1) 拙論「隠喩(メタファー)へのイニシエーション」鳥取大学教養部紀要，第19巻（1985），pp. 1－22，6節参照。

(2) 「いたい！」という語を同音異義語として処理する考え方もあり得るが，そうするとわれわれの仮定では個人の数だけ「いたい！」の語義が存在することになる。なによりも，その見方は「すでに確定した」しかも相互に「理解可能」な意味の存在を前提している。問題なのはむしろ，意味充実の現場であり，意味の造形の場面である。その点からも，この場合はメタファーとして捉えるべきであると思われる。

(3) この語は，佐藤信夫氏の著書『意味の弾性』岩波書店（1986）で用いられている。借用して使わせていただく。

(4) 佐藤信夫：前掲書，pp. 77－84参照。

(5) このような言語観は，ラッセルや前期のウィトゲンシュタイン（とくに『論理哲学論考』のそれ）に多かれ少なかれ抱かれていたと言えると思う。日常言語が世界の有様を忠実に描写するのに適しくない，さまざまの欠点を持っていることは事実であろうが，その欠点は終始欠点であり続けたのであり，それのもつ別の角度から見た意義には考え及ばなかった。そしてその欠点を非難することの裏に，世界は言語から独立に措定されうる，という前提があった。日常言語の欠点・歪みを克服することが，哲学の難問解決に直結するという彼らの（今の地点からは素朴な）情熱も，そのような前提なしにはあり得なかったろう。

(6) この二十世紀の「言語論的転回」の内部「転回」を，F．レカナティは「代表主義の，“透明な言語”の神話から，“半透明な言語”観への転換」と捉えている。卓抜な視点である。F．レカナティ／菅野盾樹訳『ことばの運命』（原題：La Transparence et l' Énonciation）新曜社（1982）を参照。

(7) 前掲の拙論：「隠喩(メタファー)へのイニシエーション」参照。なお，これらの論争点の詳細な追究が，菅野盾樹『メタファーの記号論』勁草書房（1985）にある。また，メタファー論の古典と目されるM．ブラックの論文「メタファー」が翻訳され，佐々木健一編『創造のレトリック』勁草書房（1986）に収められている。

(8) 濫喩（カタクリーシス）については，たとえば，佐藤信夫「記号の修辞性」（同『レトリックの消息』白水社（1987）に所収）を参照せよ。

(9) 身体を持つわれわれ人間は，身体を持つゆえに多くの痛みに遭遇する。以下で考察する痛みも主として身体の受ける外部からの刺激によって惹き起こされる痛みに限る。もちろん，いわゆる「幻肢痛」のような，身体への直接な刺激なしでも起こる痛みや，逆に，ロボトミー患者の場合の，身体的損傷はあっても「苦痛」のない「感覚」だけの痛みというものもあるが，これらは，当面の議論から外しても大きな支障はないと思われる。

(10) いわゆる「先天性無痛覚症」の子供は生まれながらに痛みを知らないゆえに，体じゅうに傷を作り，しばしば自己中心的でしかなく他人を思いやるという感情に欠けるという。柳田尚『痛みの人間学』講談社（1983）p．2，清原迪夫『痛みと人間』日本放送出版協会（1976）p．144．参照。

(11) 清原迪夫：前掲書，p．147。

(12) E．R．ヒルガード＆J．R．ヒルガード／斎藤稔正訳『痛みの心理学』黎明書房（1978）p．42ff. 参照。

(13) 痛みの発生のメカニズムについても，自由神経終末を特殊化された痛覚受容器とするフォン・フレイの「特殊化説」，感じられる痛みは臨界水準に到達した神経入力の総和に基づくとするゴールドシャイダーの「パターン説」，そして1965年頃にメルザックとウォールによって唱え始められた「ゲート・コントロール説」等が競合している。

「ゲート・コントロール説」は以下のストーリーで説明する。脳の中枢に刺激の位置や強度を伝達する神経系として，「感覚一弁別系」の神経繊維（細い繊維・伝達速度が小）と，痛みに伴う苦痛などの情緒・評価に関わる「動機一情動系」の神経繊維（太い繊維・伝達速度は大）という二系統の神経系がある。太い繊維は以後の伝達に関して抑制的に働き，細い繊維は促進的に働く。これらは脊髄の後角の関門（gate）を通過して上位中枢に入る。太くて速く伝達する方の神経繊維は，関門に達する前に既に出している分枝から直接上位中枢へ通じていて，上位中枢はその受け取った情報から逆に，下行する情動的・評価的指令を関門に速やかに伝える。こうして，これら三者が相互作用し合い，痛み刺激の情報（神経インパルス）の受容を，情報の量に応じて関門の開閉を制抑することによって調節している，という。耐えがたい痛みのとき，痛む部位をさすることによって痛みが和らぐと感じるが，これは太い繊維を刺激してパルスの受容を抑止している，として説明できるという。しかし「ゲート・コントロール説」ですべてが説明し尽くされる訳ではない。この説が前提する神経系の機能分化も証明済みのことではなく，またこの説が含意する痛みの「感覚」的側面と「苦痛」という情緒的側面の分離も，方法的な区別ならばいざ知らず，実際の痛みの経験の説明でどれだけ効力を持つか定かではない。ヒルガード＆ヒルガード：前掲書，p．51ff.，R．メルザック／橋口英俊・大西文行訳編『痛みのパズル』誠信書房（1983）p．153ff.，また，金城辰夫「要求と認知」（大山・東編『認知心理学講座』1「認知と心理学」東京大学出版会（1984））p．110ff. 参照。

(14) ヒルガード＆ヒルガード：前掲書，p．44参照。

(15) Melzack, R., and Torgerson, W. S. : 'On the Language of Pain' *Anesthesiology*, 34 (1971) pp. 50-59. また，ヒルガード＆ヒルガード：前掲書，p．46ff. 参照。今回は「痛みの言語」についての心理・生理学の文献を網羅的に調べる余裕がなかった。以下の議論の「科学的」根拠は，このメルザックとトーガソンの論文である。

(16) "英国のホール（K. R. L. Hall）とストライド（E. Stride）は，不安を感じている被験者が，一連の教示の中にたった１回「痛み」という言葉が現われると，痛みという言葉を含まない教示を与えた時には痛いとは認めなかったような弱いレベルの電気ショックに対して痛みを報告する，ということを見いだした"という。R．メルザック「痛みを知覚するしくみ」本明寛監訳『不安の分析』（別冊サイエンスNo.１）日経サイエンス社（1972），p．42。

(17) 清原迪夫：前掲書，p.189に，われわれとは異なった文化圏の記録映画で，「出産直前まで農耕をしていた妊婦が，木の枝にぶらさがりながら，難なく分娩をすませて……，またすぐに農耕に精をだしに畑に戻ってゆく」ものを見たという記述がある。メルザック：前掲書，p．10ff. にも類似の例がある。

(18) Melzack & Torgerson, op. cit. p. 53.

(19) Melzack & Torgerson, op. cit. p. 53, 58参照。

(20) 神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房（1980）は，数学者岡潔の文章を引用して「純粋なよろこび」のもたらす生きがいを論じている。同書，p．19ff. 参照。

(21) L．ビンスワンガー／山本・宇野・森山訳『うつ病と躁病』みすず書房（1972）pp. 86－７。

(22) L．ビンスワンガー：前掲書，p．87ff. 参照。

(23) L．ビンスワンガー：前掲書，p．82。

(24) 神谷美恵子：前掲書，p．61。

(25) セネカ／茂手木元蔵訳『怒りについて』岩波文庫（1980）p．９。

(26) セネカ：前掲書，pp. ９－10。

(27) セネカ：前掲書，p．９。

(28) セネカ：前掲書，p．11。

(29) "ὁ μὲν [sc. διαλεκτικὸς] γὰρ ὄρεξιν ἀντιλυπήσεως ἤ τι τοιοῦτον, ὁ δὲ [sc. φυσικὸς] ζέσιν τοῦ περὶ καρδίαν αἵματος καὶ θερμοῦ." (一方［の弁証家の方］は苦痛を受けたことに対する報復の欲求あるいはなにかその類のことと［定義］し，他方［の自然学者の方］は心臓の辺りの血液と熱気の沸騰と［定義］する)：Aristotle, *De Anima*, I, i, 403a 30-403b 1 (O. C. T.)。

(30) セネカ：前掲書，p.20 ff.参照。

(31) たとえば，人間の感情の仕組みを，文明化以前の人間の野生生活での，環境適用のための，きわめて巧妙に作られた脳のソフトウェアとする見解が，次の文献に見られる：戸田正直「不安：感情のアージ理論にもとづく一解釈」心理学評論，vol. 23（1980）pp. 262—268，同「情緒と行為決定」浜治世編『動機・情緒・人格』（現代基礎心理学８）東京大学出版会（1981）pp.43—67。

(32) L．ビンスワンガー：前掲書，p．135。

(33) 広瀬徹也「抑うつと悲哀」土居・笠原・宮本・木村編『神経症と精神病Ｉ』（異常心理学講座４）みすず書房（1987）p．260ff. に引用。

(34) 人間の表情分析についての興味深い結果が次の研究で報告されている：P．エクマン&W．V．フリーセン／工藤力訳編『表情分析入門』誠信書房（1987)。これによると，たとえば，基本的な表情は民族・言語・文化を越えて万国共通であるという。同書，p.33 ff.参照。